

(論文)

京都における学都形成過程 —磁場の形成とその系譜—

The formation process of the academic capital in Kyoto —Formation of magnetic field and its genealogy—

岩武 光宏*

Mitsuhiro Iwatake

要旨

新型コロナウイルスという煙幕で覆われた世界では、人々の日常を大きく変えたばかりでなく、いまだ晴れ間が見えない世界において多くの爪痕と社会不安を残している。わが国でも格差社会は顕著になり、少子高齢化に歯止めが掛かるどころか、さらに拍車を掛けている。奇しくも明治維新から154年目にあたる2022年とは、わが国の敗戦（1945年）を軸に前後（戦前77年、戦後77年）の時間的堆積がイーブンとなった近現代における節目と考える。本稿では、伝統的な古都である京都における学都形成過程を学際的かつ俯瞰的な視座での整理を試みる。

キーワード： 学都形成 大学史 建学の精神 学問的磁場

1. はじめに

2022年という年は、わが国の近現代において大きな節目の年であった。それは各人が意識するか否かにかかわらず、ある種の「グレートリセット」に近い議論の蓋然性に差し掛かったことを示唆するポイントでもあった。そのポイントとは、いうまでもなく明治維新より154年目を迎えたことである。なお明治維新の時期については、明治新政権の生成過程の時期をどのように定義するのか諸説あり、その意義についても検討の余地はあるものの、ここでは議論の対象にしない。したがって一般的に、いわゆる「明治維新」とされる1868年からの時間的な経過がどのような意味をもつかということ为背景としたうえで本稿での主題を論じることとする。なぜなら、この主題は時間軸が形成過程の輪郭を描き出すからである。薩長が主導した大日本帝国は1945年の敗戦をもって換骨奪胎を余儀なくされる。2022年を迎えた戦後日本は、ようやく近現代を俯瞰できる立場になった。すなわち明治維新から第二次世界大戦終結までの77年と戦後77年の歳月がイーブンとなったことによる精神的回復期へ向かうことを示唆している。小田村 [1995] が「占領後遺症を一刻も早く克服しなければならない」(p.4) と論じたように、いわゆる自虐史観の淵源は連合国による占領政策にあったことに論

* 総合文化学会会員、日本都市学会・関東都市学会会員

京都における学都形成過程

を俟たない。戦後早々に「冷戦の顕在化」により占領政策が転換したものの、小田村のいう「占領後遺症」は、今日まで長期にわたり日本人の内在的精神性および歴史認識に影響を与え続けてきたことにほかならない。ところが、ロシアによるウクライナへの侵攻（2022年2月24日）で始まった戦争や東アジア情勢の緊迫化により日本は安全保障に関する思考の大転換を迫られている。このことは日本人の防衛意識の転換のみならず、広義の歴史観における当事者的俯瞰力を生成するうえで敗戦を軸に時間的対称容量を満たした到達点を意味している。

以上のような現下の情勢を踏まえたうえで、江戸後期から明治維新を経た近現代を俯瞰しながら学都形成過程への考察を進める。榊原 [2018] はスーザン・ハンレーの言説を敷衍して「高度成長期までは、庶民の日常生活は江戸時代後期のそれとあまり大きく変化していなかった。つまり、明治維新では、村や町の日常生活にそれほど大きな変化はなかったのだ」(p.192)と指摘したうえで、農業就業人口や耕地面積が明治期から昭和30年代まで、あまり変わっていない点を挙げて、日本の農村の姿は江戸末期、明治初期から高度成長が始まる1950年代までほとんど変化がなかったことを論じている。榊原のいうように庶民生活が大きく変わらなかったということは事実であろう。すなわち、日本の村落共同体の秩序などの基本構造に大きな変化はなかったといえるものの、上部構造は大きく変化している。明治維新後に『県に変わり、武士は官僚に衣替えをした。しかし、江戸時代の村落共同体、あるいは町方の自主制はそのまま維持され、武士たちによって形づくられた官僚制は「高等文官試験—高文」（一八九四年から一九四八まで実施された高級官僚の採用試験。現在の国家公務員試験・総合職にあたる）のもとで再編成されたのだ』（前掲、p.211）と論じているように上部構造の変化で社会構造的に大きな影響を与えたものは、世襲制から学歴登用主義への転換である。

本稿では、世襲制から近代学歴への連続性という意味で、長期にわたり、わが国の文化文明の中心であった京都に焦点を当てる。すなわち794年の平安京遷都以降1868年の東京奠都までの千年以上の歳月において日本の都（ミヤコ）であり続けた京都の文化的特異性と都市の磁場を考察する。しかし、この特異性と磁場は多面的かつ重層的にとらえ直す余地と奥行きがあり、ここでは現在にも色濃くその特徴が残る「学都」としての側面のみを考察の対象とする。

2. 学都形成の過程

拙稿 [2018] では旧制私立大学の創設者の出身地について考察を試みた。対象を旧制の25大学¹に限定したものの、京都は「学祖・創設者」の出身分布において全国最多の8名を輩出している。さらにいえば、京都は日本の有史以来、最長期間にわたり都（ミヤコ）の地位であり続けた都市である。すなわち古都である。この比類なき時間的堆積が傑出した人材輩出に繋がったことに論を俟たない。あわせて文化的摩擦や政治的葛藤から紡ぎ出された地域的特性は日本文化そのものを如実に表すものともいえよう。これらの蓄積が学都としての都市の特徴を生成したのである。とりもなおさず具体的な現状について『統計でみる都道府県のすがた2022』（総務省統計局）によれば、人口10万人あたりの大学の数は全国1位（2020年度調査）である。また、大学収容力指数（高等学校卒業者のうち大学進学者数）においても同様に全国1位（2020年度調査）であり、「学都」に相応しい数値である。

なお本稿では、紙幅の制約もあることから学都形成の過程を部分的に概観する。まず、平安時代の

¹ 対象とした25校は1920~1932年の期間において大学に昇格したものに限定している。

初期にあたる828（天長5）年には、弘法大師空海が綜藝種智院を創設している。このことが、真言密教の思想をもって、社会に貢献する人材の育成を目的としたわが国最初の庶民に開かれた私立学校であったことをみても京都における学都形成の過程と宗教教育との連関は不可分であったことが明瞭である。次に、京都の学問的土壌の特徴は、町衆の自治の範囲が一般的な城下町と比較しても広がったことが挙げられよう。このような町衆が経済力を高め、それが実学への知的欲求に収斂したことは自然な展開であろう。

写真 1



同志社大学西門 - 影栄館

写真 2



京都大学百周年時計台記念館

上杉 [2002] によれば、町衆は「公家や神官・僧侶との距離が近いこともあって、彼らの担う文化にも触れるなかで、単に経済価値のみならず文化価値にも重きを置くことで、学問全体の発展を支えたことも見逃せない」（pp.173～174）と論じているように、多様な人々の交流が創造性を高め、文化価値を重視する地域性が涵養されたことにほかならない。このような地域性による学問風土の伝統は連綿と継承され、1872（明治5）年の学制に先立つ1869（明治2）年に六十四の番組小学校を発足させた²。わが国で最初の近代的小学校が地域主導で創設されたことをみても、この地における知的欲求の高さは明瞭である。このように公立学校においても民意が大きく影響している点が京都の特徴であり、学都形成における重要な基盤をなすものと考ええる。他方、高等教育へと繋がる種子（シーズ）はどうかであろうか。具体的な例を挙げれば、新島襄は国禁を犯して脱国し、約10年間にわたってアメリカ、ヨーロッパで学び、キリスト教の洗礼を受けて1864（元治元）年に帰国した。のちに国内外の多くの人々の協力を得て、1875（明治8）年11月29日、京都の地に同志社大学の前身となる

² 京都市ホームページ「京都市情報館」によれば、『1869年5月21日、近代小学校として日本初の開校式が、上京第二十七番組小学校（後の柳池（りゅううち）小）で行われた。当時の京都には、上京・下京のそれぞれに番組（学区）という行政区画が置かれ、番組ごとに小学校が創設されたので、番組小学校と呼ばれた。これらは、町衆による小学校創設構想に端を発したもので、私財を投じて柳池小に校舎や敷地を寄付した熊谷直孝（くまがいなおたか）を初め、多くの寄付や献金が、町衆の向学の気風をさらに高めた。その結果、地域が一丸となって学校の建設が進められたのである。こうして、全64の番組小学校は、国が学制を定める3年も前に、その精神を先取りして開校した。柳池小は、戦後の新学制によって、柳池中となった。正門横の「日本最初の小学校」と記された石碑は、町衆の教育にかける熱意を今に伝えている』（2022年11月11日閲覧）と述べているように、古くから学問を支える環境が、その地にあったことが明白である。

京都における学都形成過程

同志社英学校を設立している。新島は、学問の探求とともにキリスト教を徳育の基本として人格を陶冶する教育機関をめざし、同志社においてキリスト教主義に基づき、自治自立の精神を涵養し、国際感覚豊かな人物を育成することを教育の理念とした³。前掲 [2002] では、同志社創設について「キリスト教であるがゆえに、大阪府知事には拒否された学校を、京都では府関係者の支持も得て開くことができた」(p.176) と述べているように、その受容力の高さも見逃せない。京都は日本文化そのものを深めながら、室町時代には明の文化が入ったり、安土桃山時代には南蛮寺ができるなどヨーロッパ文化を受け入れたりとその土壌は明治以降の私学の興隆にも大きく作用している。

さらに、京都大学 [1997] によれば、「京都大学の前史を形づくる第三高等学校は、明治初年創設の大阪舎密局を受け継いだものであるという。その淵源は遠く慶応元(1865)年 8月、長崎精得館に付設された分析研究所時代に遡る」(p.4) と述べているように、当初は大阪の地が選ばれている。この理由について、江戸時代を代表する儒者である中井竹山、帆足万里らが早くからこの地に大学校の設立を提唱していたことや、江戸開成所に匹敵する高等教育機関を西日本につくる東西バランス論、麻田剛立、橋本宗吉、緒方洪庵らに代表される大阪蘭学の伝統が、理化二学(化学・物理)講習の環境に相応しかったことなどが挙げられる。ところが、舎密局を起源とする第三高等中学校は、1886

(明治19)年に大阪から京都へ移転することが決定し、1889(明治22)年に京都吉田の地に開校した。このことは京都府および京都市民の民意によるところが大きい。「文相森有礼の意向が強く働いたというが、その背後で、京都府側の積極的な誘致運動が展開されており、逆に大阪府側の引き止め工作はほとんどなきに等しかった」(前掲、p.79) と述べているように、京都府側が10万円の寄付を申し出たことも決定打となった。すなわち政治・経済の中心地を東京、大阪に譲るも文教の中心地「学都」としての京都のアイデンティティの発揚と存在意義を示すある種のムーブメントにほかならない。そして、1894(明治27)年9月に第三高等中学校、第三高等学校と改称。1897(明治30)年6月には京都帝国大学が創設された。

くわえて京都高等教育の興隆には、仏教本山との関係も大きな要素であり、見逃すことができない。前述の綜藝種智院をはじめ種々の仏教系教育機関がのちの私立大学へと発展した事例は少なくない。その代表例として、1639(寛永16)年に浄土真宗本願寺第13世教興院良如が本願寺境内に創建した「学寮」が挙げられよう。これこそが龍谷大学の起源である。その初期から学林の伝統を形成し、幕末・維新の開明の時代には、「世界の進運に対応し、近代的学校制度に転換し」⁴ている。

龍谷大学 [2000] によれば、「体制的枠組みに沿いつつ自律的に教団形成の途を選択したのであり、幕藩権力はむしろこれを追認して制度化し、あるいは修正を加えて体制内に位置づけていったと捉える方が、近世仏教教団の歴史の実情に即しているようにも思える」(p.7) と述べているように幕藩体制の宗教的イデオロギーのひとつに組み込まれたと考える。とりもなおさず、封建的ヒエラルキーを内在する教団組織にとって「僧侶集団の創出と教団教学の確立」は不可欠な要素であった。『幕府の統制・保護下に入った天台・真言・浄土の各宗では、近世初頭から「檀林」「学寮」「勸学寮」などと呼ばれた僧侶養成・宗学研究機関が競って設置され、盛況であった』(前掲、p.8) と述べている点をみても教団組織を維持・運営する上で「教育・研究機関」は各宗派における重要な課題であった

³ 同志社大学ホームページ (<https://www.doshisha.ac.jp/information/history/neesima/neesima.html>) を参照(2022年11月11日閲覧)。

⁴ 龍谷大学 [2000] 「序章」(p.1) より引用。

ことが窺われる。いいかえれば、幕藩体制による国家確立期において、それに適合かつ自律的な教団形成とは、「日々、門徒衆中に接して教化に従事するのは、末寺の寺院住職、ないしは法座などの場で信心勸化を説く説教僧などである」（前掲、p.10）として本願寺設立の公的教學機関で一定期間の修学により教化者僧侶をできるだけ多く養成することが不可欠だったのである。したがって、良如が担った教団的課題のひとつが学寮（宗派末寺僧侶の修学施設）の創建であった。「各宗僧侶の学問奨励は幕府の寺院法度に規定されているところでもあり、近世的支配体制に順応すべく教団本末体制の整備・強化のうえからも、学寮施設の造立は本願寺派教団にとっても、緊要な教団的課題」（前掲 p.11）と述べているように、学寮造立の気運は教団組織内外から高まっていったことが推察される。このように近世仏教の教育機関は幕藩体制の生成過程と親和的な発展を遂げたのである。

表1 京都府のおもな仏教系大学一覧

大学名	宗派	創立
龍谷大学	浄土真宗本願寺派	1639年
京都女子大学	浄土真宗本願寺派	1899年
大谷大学	浄土真宗東本願寺派	1665年
京都光華女子大	浄土真宗東本願寺派	1939年
仏教大学	浄土宗	1868年
京都文教大学	浄土宗	1904年
京都華頂大学	浄土宗	1911年
京都西山短期大学	浄土宗西山派	1280年
嵯峨美術大学	真言宗大覚寺派	1971年
種智院大学	真言宗(古義・智山・豊山の各宗派)	828年
花園大学	臨済宗妙心寺派	1872年

出所：各大学ホームページおよび資料を参照して筆者が作成。

幕末・維新时期になると、京都は舞台の中心であるため、学林も時代の荒波を受けることとなり、改革を促された。「江戸時代初期に徳川家康の取り立てによって東本願寺が別立されて以来、東本願寺は徳川幕府と近い関係にあった。このため幕末期にいたって本願寺は勤王派の立場をとり、東本願寺は佐幕派に立ったのである。とくに幕末期には本願寺は勤王的事業を進めていく」（前掲、p.368）と述べているように、本願寺は諸国の門末に尊王攘夷を説き、朝廷へ金一万両を献納するなど、立場を鮮明にしている。この時代には儒教や神道が中心となって廃仏毀釈運動が盛んになり、また開国によるキリスト教の教勢拡大も仏教にとっては脅威であった。そのため学林では仏教を護る「護法運動」を展開していく。このような背景のなかで明治初期には仏教とキリスト教の角逐が散見された。

⁵ 廃仏毀釈による寺院の廃合・整理は、藤井 [1974] によれば、「京都では神仏分離令発布を契機に始まり、明治五年（一八七二）、六年を頂点にして、明治十年頃まで盛んであり、そして明治十年代に入るとやや落着きを見せたといつてよい。しかし、その後も寺院の廃合と移転は根強く続き、大正時代にほぼ終わりを告げた」（p.540）と述べているように、明治初頭の京都の仏教界は混沌と混迷をきわめており、近代社会に生き残る宗門の道を模索する混乱の時代であった。

京都における学都形成過程

したがって時代に対応するように学林は変遷を重ねていった。まず、学林を1876（明治9）年には大教校と改称し、全国7カ所に中教校、各県に小教校を設置した。次に、1900（明治33）年には学制を更改し、仏教大学・仏教高等中学・仏教中学の3種とする。そして、1902（明治35）年に仏教大学を仏教専門大学（京都）と高輪仏教大学（東京）とに分立するも、1904（明治37）年には両大学を仏教大学（京都）に統合する。さらに、1905（明治38）年に専門学校令により認可される。1922（大正11）年には大学令による大学となる。龍谷大学と改称。以上のような発展を続けた。

上掲の一覧をみるに学校としての連続か非連続かにかかわらず、いずれも古い時期に淵源をもつ教育機関であることは明瞭である。その発展過程と形態は様々であり、京都ならではの宗教色と学問的風土を背景に栄枯盛衰を経て今日の大学へと繋がっており、人材の輩出による教育の再生産により、学都が自律的に形成されたと考える。上掲の仏教系大学群では、旧制大学は龍谷と大谷の2校であるが、他の大学も各宗派に支えられ、確固たる教育理念と特色ある建学の精神を掲げている。拙稿〔2020〕で論じた「新・旧システムの角逐があった地域に知的欲求の高まりがみられ、やがてそれが建学のダイナミズムに繋がる」という仮説をかんがみるに、東西本願寺のもとにそれぞれ旧制大学と女子大学が設置され、今なお現存していることは仮説を実証する事例とも考えられる。

写真 3



龍谷大学本館

写真 4



龍谷大学南館

3. 社会変動の舞台へ〔佐幕と倒幕〕

京都が明治維新の舞台になったことに異論はないだろう。しかし、それは朝廷の存在が大きく作用したもので、ながらく変革の思想が発酵する土地ではなかったはずである。

奈良本、森谷〔1974〕は、「二百有余年にわたって、徳川幕府が押しつけてきた非政治都市の理想がそのままに実在しているというのが京都の姿だった」（p.14）というようにしばらく非政治的ではあったものの、時代的外圧によって京都は政治の中心舞台となり、京都朝廷は強力な政治的発言権をえて世論の中核へとようになっていく。すなわち、1853（嘉永6）年のペリー来航に際しての「幕府の態度は終始事なかれ主義であった。内に対して外に対しても断固たる決意を示しえなかった」（前掲、p.16）と述べているように、幕府の姿勢は多くの人を失望させ、幕閣を動かす力を幕府以外に求める行動へ繋がった。そのため幕閣に影響力を行使できうる存在といえ、京都の朝廷（征夷大將軍の任命権者）ということになり、ましてや諸外国との国交を結ぶ「名目上の主権者も、極めて曖昧ではあ

ったが天皇ということ」(同、p.16)になり、京都には憂国の士が雲集するようになっていく。いいかえれば、1857(安政4)年から翌年にかけての政争(将軍継嗣、条約勅許の問題)は、京都を非政治都市から政治都市へと転換(回帰)させた。他方では、尊王攘夷派と称する志士たちの活動は過激化し京都市中の治安は大きく乱れた。この事態に対応すべく幕府は親藩である会津藩主松平容保を京都守護職に任命し治安の回復にあたらせた。とはいうものの、依然として天誅という政治テロも横行しており、将軍の上洛にともない新選組も成立した。1863年には、八月十八日の政変で公武合体派の会津藩と薩摩藩による尊王攘夷派公卿とその背後の長州藩の追放。佐幕派と倒幕派の角逐。1864(元治1)年7月に禁門の変(蛤御門の変)。まもなく敵対関係の薩摩藩と長州藩は同盟関係となる。「幕末の政局にあつて最も有力な四藩主、つまり薩摩・越前・宇和島・土佐の諸藩主も京都朝廷の招きにより上洛していた。薩摩はすでに長州と結んで幕府を見限っており、土佐はあくまでも親幕的であった。それらの意見が虚々実々の争いを展開して、京都の地はすさまじいまでの政治の過熱があつた」(前掲、p.30)というように名実ともに京都は政治の中心の地位を復していた。

鎌田[1974]は「朝廷は、最高の政治権力を掌握したといつてもそれは名目上のことであり、実質的にはそれを運用する政治的能力も機構ももってはいなかった。徳川慶喜は、そのことを充分承知しており、そのうえで大政奉還という名をすてて実をとる策にでたのであつた」(p.384)と論じているように1867(慶應3)年には徳川慶喜は大政奉還に踏み切るも、なおも政治の実権を握り続けることを画策したものであつた。そして1868(慶応4)年の「鳥羽・伏見の戦い(戊辰戦争)」へ展開していった。

写真 5



金戒光明寺〔松平容保公本陣旧蹟〕

写真 6



二条城二の丸御殿〔大政奉還の舞台〕

朝敵であった長州藩が錦旗をあげて薩摩藩と共に官軍となり、近代日本を牽引していく存在となった。一方では、会津藩主松平容保は京都守護職の職務を忠実に遂行したにもかかわらず、朝敵となった。司馬の『王城の護衛者』で描かれた晩年の容保が「孝明帝の宸翰」を竹筒に入れて首から下げて肌身離さなかつたという説話こそ新旧交代の角逐から生じた怨念であり、京都における憧憬と対照をなす、もう一方の精神的土壌であり、リアリズムと革新を発酵させる風土に繋がるものであろう。

京都における学都形成過程

他方では、官軍総督等として旧幕軍討伐のため山陰・越後・会津を転戦した西園寺公望が維新もない1869年に京都御所内の私邸において私塾立命館を開設した。ところが、塾の動向に不穏を感じた京都府庁（太政官留守官）により差留命令を下し、私塾立命館はわずか1年足らずで閉鎖された⁶。しかし文部官僚であり、西園寺が文部大臣の時に秘書官として抜擢した中川小十郎によって1900年に京都法政学校が創立された。中川は京都帝国大学や日本女子大学校の創立にも参画しており、いわば学校経営の経験を積んでいた。その教育理念の原点には、学びたい者に機会を提供し、いずれは高等教育の裾野を広げていくという志があった。1905年には西園寺公望が「立命館」の名称継承を許諾した（非連続に連続した）ことで立命館は再興されることとなり、1913年に立命館大学を名乗った。1922年には、大学令による「立命館大学」（旧制）へと昇格した⁷。「自由と清新」の建学の精神を掲げ、社会に開かれた大学として学都の私学を代表する総合大学へと発展していった。

4. 京都の学問的磁力

近代京都における学都形成の磁力を強めたのは京都大学の存在にはほかならない。「自由な学風」を基盤として人文科学から最先端の自然科学までのあらゆる学問領域における学術研究拠点であり、各々の研究分野が強烈な磁場となっていることに論を俟たない。なかでも『京都大学の人文科学研究は、1906年、現在の文学部の前身である文科大学が設立されたことに始まる。小説家・評論家として活躍した高山樗牛が、「京都は町そのものが博物館ともいうべき町であり、そういうところにこそ文科大学を早急につくる必要がある」という論稿を発表するなど、社会からの要請も少なからずあった』⁸と述べているように、人文学の存在感は創設時より大きい。

さらに、学風に大きな影響を与えたのが、「フンボルト理念」と呼ばれるドイツの大学の研究中心主義の導入であった。「研究中心主義とは、講義だけでなくゼミナールをカリキュラムに組み込み、学生に研究をさせるという、現在の大学では当たり前になっている教育システムのことである」⁹と説明しているように、当時はドイツの大学で導入された新しい教育法であり、ドイツ留学から帰国した教授たちを通して世界へと広がっていった。アジアでは京都大学法学部の前身である京都帝国大学法科大学が初めて導入しており、文科大学もこれに倣ったものである。

1910年には、文科大学哲学科で西田幾多郎が倫理学担当の助教授に就任した。1914年から14年間にわたり西田は哲学講座の教授を務めている。宗教学に波多野精一、哲学に田邊元、倫理学に和辻哲郎など錚々たる研究者を教授陣として招いた。研究中心主義の学びと西田哲学の魅力により優秀な学生たちが哲学科に集まってきた¹⁰。すなわち西田や同僚たち、およびその弟子たちによって「京都学

⁶ 立命館大学ホームページ (<https://www.ritsumei.ac.jp/profile/about/history/chronology/moreinfo01/>) を参照 (2022年12月3日閲覧)。

⁷ 前掲ホームページ (<https://www.ritsumei.ac.jp/profile/about/history/chronology/moreinfo04/>) を参照 (2022年12月3日閲覧)。

⁸ 京都大学創立125周年記念事業特設サイト (kyoto-u.ac.jp) <https://125th.kyoto-u.ac.jp/discover/02/> より引用 (2022年11月20日閲覧)。

⁹ 前掲のホームページより引用 (2022年11月20日閲覧)。

¹⁰ 西田とその同僚たち、さらに彼らが育てた優れた弟子たちによって形成されたのが「京都学派」である。西田自身も傾倒した禅を研究の中心に置いた人としては、仏教学の久松真一や宗教学の西谷啓治が出た。また、マルクス主義に関心を寄せ、オピニオンリーダーとして活躍した三木清や戸坂潤、科学哲学・数理哲学の研究者として知られる下村寅太郎、評論家の唐木順三や林達夫、文部大臣になった天野貞祐など、多彩な人材が巢立

派」は形成された。藤田によれば、「京都学派は一定の理論を共有した集団ではありません。京都学派という名前そのものが、もとはといえば、戸坂が西田の哲学とそれを継承する田邊の哲学とをまとめて、批判的に呼んだものでした。京都学派が豊かな業績を生み出すことができたのは、自ら思索し互いに批判し合いながら真理を求めていく、そのような思索のスタイルを共にする『知的ネットワーク』であったからだと言えるのではないのでしょうか」¹¹と述べているように、師弟が批判し合い真理に迫ることで双方向的な結びつきが生まれることが特徴であり学風でもある。西田から始まる京都学派の哲学の特徴を示す中心的概念を矢野 [2020] は『「自覚」である』(p.11) と指摘したうえで、『「作られたものから作るものへ」という西田の歴史哲学を端的に示すテーゼがその歴史的主体の性格の特性をよく示している』(同、p.11) と述べているように、京都学派の歴史哲学は三木清の「戦時変革」、高坂正顕や高山岩男らの「大東亜共栄圏建設」などの主体の原理は思想的拡大に繋がっている。また、森田 [2020] は「形成」の概念について、西田のテーゼが想起されることを念頭に「歴史的社会的被拘束性と実践的主体性との両面から人間をとらえ直そうとするマルクス主義の思想と共に、当代日本の知識人の間に大きなインパクトを与えた」と論じているように、西田の思想は「人間形成」の論理であり、その系譜に引き継がれた「形成論」であり、それ自体が「学都形成」の主体であると考えられる。

5. 戦後京都のあらたな磁場〔革新と保守〕

1960年、1970年のふたつの角逐（安保闘争）に揺れる世相のはざま。すなわち戦後日本の高度成長期の最中に当たる1965年に宇宙物理学者荒木俊馬によって京都産業大学が創設された。同大学について拙稿 [2020] では、その特異な発展を論じた。とりわけ草創期において理事として参画した岩畔豪雄に注目した。岩畔は戦前に異能のインテリジェンス将校として数々の歴史の舞台を踏んできた人物であったが、戦後は沈黙を貫き「大戦の省察」というべき思索の日々を送っていた。したがって岩畔は1945年に陸軍省調査部長を最後に1965年の京都産業大学理事就任までの20年間を概ね無職で通している。しかし同大学の創設に与してからの岩畔は、知力、創造力、人脈などを学園発展のために、傾注している。いいかえれば、岩畔が戦前に手掛けた陸軍中野学校や登戸研究所、あるいは日米交渉の経験、総力戦推進派の人脈、これらを戦後再結集させ、その理想を未来志向で再現したものが京都産業大学の「建学の精神」に血肉化したともいえよう。まさに荒木の「理想の大学」構想と岩畔の積年の思いが合一昇華したのである。

そもそも岩畔の京都産業大学草創期における事績は大学の正史にもほとんど記載されておらず、学内の構成員が世代交替している今日においては、概ね忘却されているに近い状態であった。近年、その事績を掘り起こし改めて世に問うたのが川合全弘の論考 [2017a]、[2017b]、[2019] であり、同大学史における再検証のエポックでもあった。ともあれ現在、同大学は戦後創立された数多くの大学のなかで質実ともに異例の発展¹²を遂げていることに論を俟たない。そして、その発展の特長は特

っていった。以上の内容は、注釈8と同様のホームページ引用（2022年11月20日閲覧）。

¹¹ 前掲のホームページより引用（2022年11月20日閲覧）。

¹² 京都産業大学 [2015] によれば、「昭和39（1964）年12月18日、文部省から待望の設置認可が内示された。図書・文献の増強等いくつかの留意事項が付けられていたが、経済学部（入学定員200名、収容定員800名）・理学部（入学定員各学科40名、収容定員計320名）からなる大学の設置が認められたのである」（p.18）と述べてい

京都における学都形成過程

異な人脈および地域性を合わせ持った生成過程を踏んだことにある。すなわち、京都の磁場が作用したものと考える。本稿で辿ったように近現代において、京都はめまぐるしい権力闘争の舞台となり、激しい角逐があった。そこには憧憬と怨嗟もあった。したがって角逐の結果による社会変革では、首都の座を東京に奪われ、商都の座は大阪が堅守する状況で、「学都」の道を選ぶことが歴史的必然でもあったと考える。京都大学を中心とした「学問の自由」という土壌は、多くの優れた研究者を引き寄せる魅力があり、さらなる人材を輩出する場となっていく。京都産業大学の発展要因は、大学界の周縁で発生した熱源、いわゆる安保闘争の余熱から学生運動の嵐が吹き荒れた時期と重なり、研究の実質的停止を避けたい研究者と実質的教育を受けたいとする学生との需給が合致しての磁場形成の側面と歴史的学都形成過程における相乗効果によるものと考え。同大学初期の役員には、岩畔をはじめ岸信介、福田赳夫、西内雅、源田実などの錚々たる名士が並び、また学生に対しても開学2年目から毎年のように、アーノルド・トインビー博士やレイモン・アロン博士、ワイツゼッカー博士など世界の碩学を招聘して知的欲求を刺激した。

写真 7



若泉敬京都産業大学教授

写真 8



中央にアーミン・マイヤー駐日米国大使夫妻

右側に荒木俊馬京都産業大学初代総長夫妻、左側に若泉敬夫妻

このように磁場による学都形成は、あらたな磁場を構築し次代を推し進めるダイナミズムを生み出すのである。その意味において、若泉敬は注目に値する。若泉は開学まもない時期に京都産業大学世界問題研究所教授（1966年）に就任している。川合 [2017a] は、『荒木俊馬日記』に基づき岩畔が1964年2月から1966年11月までに荒木と大学のために行った仲介業務を整理している。それによれば、「昭和四十一年一月二十七日、岩畔が上京中の荒木に若泉敬を引き合わせる」とあるものの、川合による注釈には、1965年11月27日に開催された京都産業大学開学式招待者名簿に若泉の名前があ

るように、経済学部と理学部の2学部からスタートしたにもかかわらず、2022年現在では神山キャンパスに10学部・10研究科を擁した総合大学（学生数約15,000名）となっていることからあきらかである。

る点を指摘したうえで、若泉と荒木の初対面がこれ以前である可能性が高いことを示唆している。川合の指摘のとおり若泉の東大時代の恩師矢部貞治と岩畔の関係などを勘案すれば、かなり以前からの人脈形成は始まっていたとみるべきであろう。さらに川合は、岩畔による大学人事のための人物紹介のなかで若泉の事例を「岩畔最大の功績」と評価している。すなわち若泉は岩畔の後任として第二代の京都産業大学東京事務所長兼世界問題研究所長を引き継ぐのみならず、「日米交渉史においても岩畔の先例に倣う大きな足跡を残した」（前掲、p.235）というように¹³、戦後日本の国民的悲願ともいうべき沖縄の祖国復帰・施政権返還に裏面より尽力している。若泉は英米留学の経験などから米政権中枢にも太い人脈を持つ気鋭の国際政治学者であった。1967年秋から佐藤栄作首相の要請を受け、いわば特使として秘密裏に米高官と交渉を担当した。沖縄返還決定を盛り込んだ日米共同声明の草案づくりに尽力した。「敗戦で失った領土を取り返すことは容易ではない」若泉は米国の強硬な姿勢と佐藤首相のあいまいな発言との板挟みに遭った当時の苦悩を教え子の吉村信二¹⁴に吐露したという。すなわち「核抜き・本土並み」をうたい、1972年（昭和47年）に実現した沖縄返還の裏で、「有事の際の核再持ち込み」を認める密約が、日米首脳間で交わされていた。佐藤首相を説得し、この密約の草案を作成したのが若泉であった。しかし若泉〔1994〕によれば、「私はすでに“繊維、をめぐろおどろおどろしい現実を、これまでの私の物語でも繰り返す暗に明にふれてきた。日米首脳交渉において沖縄返還と表裏をなすとはいえ、私の“志”とは関係のないこの問題に、なぜ私がこれ以上関わりをもたねばならないのか」（p.607）と述べているように、若泉の功績の裏面には苦悩をとまなう悲劇性を孕んでいたことも推察される。

他方、吉村〔2017〕によれば、若泉が研究者としてはもとより教育者として学生指導にも心血を注いでいたことが窺える¹⁵。また、『矢部日記』（昭和四十年八月十四日）には、「十時ごろ若泉敬がきて、国防問題を政治の舞台に乗せる目的で防衛研究所を辞め、衆議院に出る準備をしたいという話。二回目くらいに当選の目標をおくということ。極めて筋が通っているし困難も十分覚悟しているらしいので、快く諒解した」（p.608）と記述されているように、若泉が折にふれて恩師の矢部に自らの将来を相談していたことが窺える。理想を実現するためには、アカデミアの世界に閉じ籠るのではなく、広くポリティクスの世界へ勇躍せんとする高い志を抱いていたことがあきらかである。しかしその方向性は、前述のように京都産業大学教授就任によって、同質の理想実現のための手段が発展的に変容したことを意味している。その際、蹉跌や葛藤があったことは考えられるが、政治よりもむしろ「研究と教育」の方がより政治的ダイナミズムを発動できるとの判断が働いた側面もあるのでは

¹³ 池井〔1991〕によれば、「日米交渉の下準備は民間からなされた」（p.213）として「個人の資格で陸軍省の岩畔大佐と近衛首相に近い井川忠雄を派遣し」（pp.213～214）と述べているように、ウォルシュ、ドラウドの米国側の二人の神父との下準備に奔走している。また、野村大使の特別補佐官として日米開戦回避に尽瘁した岩畔の奮闘ぶりは、西木の小説〔2011〕にも、その人物像が印象的に描かれている。

¹⁴ 吉村は同郷の縁もあり若泉に創設もない京都産業大学への入学を直接に勧められており、学生時代にその薫陶を受けたひとりである。卒業後も同大学の幹部職員として若泉の志を引き継ぎ、各部署において、その精神を實踐した。さらに現在も「三縁の会」を主宰し若泉の教育理念の次世代への継承に注力している（2022年12月2日聞き取り）。

¹⁵ 京都産業大学同窓会報『むすび』第58号〔2022〕「全国各地の同窓生から」（pp.32～43）によれば、同窓生から寄せられた大学在学中の思い出や全国各地における近況報告などの投稿が掲載されている。そこにみる投稿内容には、思い出の師として若泉敬の名が散見される（複数の者が若泉の名を挙げている）。以上のことから現在もなお多くの若泉の教え子に、その志が生き続けていることが感知される。

京都における学都形成過程

ないだろうか。それが、次世代への「人づくり」を標榜する同大学の磁力であろう¹⁶。

すなわち同大学の「建学の精神」にある大学の使命とは、将来の社会を担って立つ人材の育成にあるとしており、「その教育の目標は、高い人格をもち、人倫の道をふみはずすことなく、社会的義務を立派に果たし得る人をつくることであり、しかもその職域が国内であろうと海外であろうと、その如何を問わず、全世界の人々から尊敬される日本人として、全人類の平和と幸福のために寄与する精神をもった人間を育成することである。このような人間は、日本古来の美しい道徳的伝統を精神的基盤とし、東西両洋の豊かな文化教養を身につけ、絶えず変動する国内情勢に関して十分な知識をもち、その科学的分析によって正しい情勢判断のできる能力を備え、如何なる時局に当面しても、常に独自の見解を堅持し自己の信念を貫き得る人間である」¹⁷という戦後日本の精神性を健全なものに建て直すに相応しい内容であると考えられる。さらにいえば、「産学連携」はアカデミズムに反するとさえいわれた時代に、あえて「学問と企業をむすぶ」を建学の理念に掲げたことは、磁場としての京都の精神風土にも合致するものであった。具体的には、荒木と岩畔による情報化社会の到来を見据えた先駆的なコンピュータ教育であり、国家的見地に立つての世界問題研究所の設立は、「グローバル化の時代」を見越しての構想であり、いずれも画期的なものであった。そして政治的、教育的、その両面において国策を推進した若泉の事績は、左傾化した戦後の古都における対抗磁場として清廉な風を吹かせ磁力を散逸したといえよう。すなわち古都に内在された中道的保守性を掘り起こし、人材の集積と再生産を促したのである。このことは戦前・戦中の複合的な経験値を「建学の理念」に投影して戦後の経済成長・産業社会に対応できる人材育成を具現化したものにほかならない。くわえて、同大学発展の要素で見逃してはならない点は、学都京都を背景にした人的受容力にある。とりわけ、若泉は大学発展のために、海外人脈による知の集積に尽瘁したのみならず、大学での業務とは別に沖縄返還交渉の国事に隠密で奔走した。若泉 [1994] によれば、『当時私が奉職していた京都産業大学の上司であった同大学初代総長荒木俊馬氏、同大学理事長小野良介氏、同大学附置「世界問題研究所」初代所長岩畔豪雄氏に対して抱く私の深甚の感謝の念である。(中略) 私のとった行動について私自身が説明や報告をしたり、あるいは逆に説明を私に求められたりすることは皆無であった。だが、お三方ともそれぞれに勘の鋭い具眼の士で、いわば以心伝心で、ある程度まで推察しておられたものと思われる』(pp.69~70) と述べているように、大学幹部はもとより大学および京都の地に息づく知的寛容性が若泉の活動に有形無形の追い風となったことにほかならない。

また当局である京都産業大学 [2013] によれば、「俊馬先生をはじめとした大学首脳陣は、抜群の力量を持つ教授陣が、それぞれの行動半径を広げて行くことについて黙認し、あるいは支援したようである。いうまでもなく、教授たちが国際社会に大きくはばたいて行けば、その体験や成果が、き

¹⁶ 京都産業大学 [2013] では、若泉について「戦後の日本において最大の難題の解決にあたり首相の絶大な信頼を得ていたのに、この日米首脳会談の舞台の幕がおりるのにあわせて京都産業大学での学究としての生活に戻り、社会的な名利をもとめようとは一切しなかった。自らの人脈をつかって、あるいは国際政治学者、評論家としての力を発揮して世界の碩学を大学に招いた。研究と講義、京都産大の発展の土台づくりに没頭して、ありあまる情熱を本山のキャンパスにぶつけた。政治の舞台に再び、姿を見せることはなかった。定年を前にして健康上の理由から退職した。退職金のすべてを本学に寄付した。本学の発展をひたすら願って、故郷の福井県へ淡々として、去った」(p.94) と述べているように、生きた国際政治のダイナミズムを体現し、それを次代の若者に伝えていくことにより草創期の大学に「建学の精神」を息づかせた功績は大きい。

¹⁷ 京都産業大学ホームページ (<https://www.kyoto-su.ac.jp>) を参照 (2022年12月3日閲覧)。

っと学生たちに反映され、教育に役立つと信じて疑わなかったからであろう。教授陣の世界への雄飛を見守った首脳陣の力量もまた、本学の発展の基礎を築いた」(p.95)と述べているように、わが国の大学史に類をみない同大学の独特な発展(戦後の国策に向き合った「建学の精神」)の根源には、荒木、岩畔の器量や人間的度量、構想力はもとより学都に培われた学問的寛容性も細微に影響したものと考える。

6. おわりに

冒頭に述べた維新から154年目という近現代史上のメルクマールは、同時に京都から東京へミヤコが移って(東京奠都)以降の時間を意味する。奠都を軸に京都におけるミヤコであった期間との時間的対称容量を満たす到達点とは、千年以上先になる。すなわち、それほどに京都のミヤコであった経験則は、後世にまで影響するものとする。このような背景をもつ京都について本稿では、「学都」というひとつの側面から、その形成過程のごく一部を概観した。まず、原初的な宗教都市としての性格から起こる宗門による角逐や勢力争いから生じる知的欲求があった。次に、異教徒、異文化との学問的対峙による知的勃興があり、次第に建学のダイナミズムへと展開していったのである。とりわけ、幕末維新时期における社会変動にともなう角逐は、京都を政治的都市に再転換させ、それによって発散されたイデオロギーが後年の学都形成の原動力にもなったといえよう。京都の地は学問の磁場として、近代に入り帝国大学の誘致、高等教育機関の発達・再生産機能は「知の集積」を促進したのである。あらたな磁場の創出による「知の集積」は現在なおも進行の途上であり、「グレートリセット」をとまなう地球社会の将来像を議論するうえで、大きな示唆と問題提起を突き付けていることにはほかならない。

参考文献

- 朝日新聞(2022年9月7日付、若泉敬、吉村信二の記事)
- 仏教大学ホームページ(<https://www.bukkyo-u.ac.jp>)、2022年11月14日検索
- 同志社大学ホームページ(<https://www.doshisha.ac.jp>)、2022年11月14日検索
- 藤井学[1974]、『廃仏毀釈』、『京都の歴史第七巻 維新の激動』、學藝書林
- 学校法人京都産業大学大学史編纂室[2001]、『学祖 荒木俊馬先生と京都産業大学—建学の心をたずねて』、学校法人京都産業大学
- 学校法人京都産業大学大学史編纂室[2001]、『学祖 荒木俊馬先生と京都産業大学—建学の心をたずねて』、(<https://www.kyoto-su.ac.jp/about/enkaku/kenkokoro.html>)、2022年12月3日検索
- 学校法人京都産業大学50年史編集委員会編[2015]、『学校法人京都産業大学50年のあゆみ』、学校法人京都産業大学(https://www.kyoto-su.ac.jp/about/ahcetq0000000sdb-att/2016_50th.pdf)、2022年12月3日検索
- 花園大学ホームページ(<https://www.hanazono.ac.jp>)、2022年11月14日検索
- 池井優[1991]、『増補 日本外交史概説』、慶應通信
- 池上彰、佐藤優[2021]、『真説 日本左翼史 戦後左派の源流 1945—1960』、講談社
- 池上彰、佐藤優[2021]、『激動 日本左翼史 学生運動と過激派 1960—1972』、講談社
- 池上彰、佐藤優[2022]、『漂流 日本左翼史 理想なき左派の混迷 1972—2022』、講談社
- 岩武光宏[2018]、『旧制私立大学の学祖・創設者の出身地にみる地域特性(についての一考察)』、『東京交通短期大

京都における学都形成過程

- 学研究紀要』、第23号、東京交通学会、pp.29-44
- 岩武光宏 [2019]、「幕末維新期にみる社会変動と知的欲求」、『東京交通短期大学研究紀要』、第24号、東京交通学会、pp.57-70
- 岩武光宏 [2020]、「戦前・戦後を貫く知的欲求に関する一考察—A I 時代と岩畔豪雄の省察—」、『東京交通短期大学研究紀要』、第25号、東京交通学会、pp.71-86
- 岩武光宏 [2021]、『教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察：大分県出身の大学創設者を事例として』、『総合文化学論輯』、第15巻、総合文化学研究所、pp.25-41
- 鎌田道隆 [1974]、「鳥羽・伏見の戦い」、『京都の歴史第七巻 維新の激動』、學藝書林
- 川合全弘 [2017 a]、「一軍人の戦後 —岩畔豪雄と京都産業大学— (上)」、産大法学50巻1・2号、pp.221-239
- 川合全弘 [2017 b]、「一軍人の戦後 —岩畔豪雄と京都産業大学— (中)」、産大法学51巻1号、pp.27-43
- 川合全弘 [2018]、「京都産業大学世界問題研究所五十年外史1966～2016」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第33巻、pp.1-51
- 川合全弘 [2019]、「一軍人の戦後 —岩畔豪雄と京都産業大学— (下)」、産大法学53巻2号、pp.1-74
- 川合全弘 [2021]、「科学技術の発展と人類社会の変化—就任の挨拶に代えて (1) —」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第36巻、pp.175-176
- 小林英夫 [2005]、『満州と自民党』、新潮新書
- 栗本慎一郎 [1994]、『間違いだらけの大学選び 怒濤編』、朝日新聞社
- 京都文教大学ホームページ (<https://www.kbu.ac.jp/kbu>)、2022年11月14日検索
- 京都大学百年史編集委員会編 [1997]、「総説編」、『京都大学百年史』、京都大学後援会
- 京都華頂大学ホームページ (<https://www.kyotokacho-u.ac.jp>)、2022年11月14日検索
- 京都光華女子大ホームページ (<https://www.koka.ac.jp>)、2022年11月14日検索
- 京都女子大学ホームページ (<http://www.kyoto-wu.ac.jp>)、2022年11月14日検索
- 京都西山短期大学ホームページ (<https://seizan.ac.jp>)、2022年11月14日検索
- 京都市ホームページ「京都市情報館」(<https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000013266.html>)、2022年11月10日検索
- 京都産業大学同窓会事務局 [2022]、『むすび』京都産業大学同窓会報第58号
- 京都産業大学ホームページ (<https://www.kyoto-su.ac.jp>)、2022年12月3日検索
- 奈良本辰也、森谷尅久 [1974]、「変革の都市」、『京都の歴史第七巻 維新の激動』、學藝書林
- 西木正明 [2011]、『ウェルカム トゥ パールハーバー (上)』、角川文庫
- 西木正明 [2011]、『ウェルカム トゥ パールハーバー (下)』、角川文庫
- 小田村四郎 [1995]、『占領後遺症の克服—祖国の真の独立のために—』、国民文化研究会
- 小笠原道雄、森田尚人、森田伸子、田中每実、矢野智司 [2020]、『続 日本教育学の系譜 京都学派とマルクス主義』、勁草書房
- 大谷大学ホームページ (<https://www.otani.ac.jp>)、2022年11月14日検索
- 立命館大学ホームページ (<https://www.ritsumei.ac.jp>)、2022年12月3日検索
- 龍谷大学ホームページ (<https://www.ryukoku.ac.jp>)、2022年12月3日検索
- 龍谷大学三百五十年史編集委員会 [2000]『龍谷大学三百五十年史 通史編 上巻』、龍谷大学
- 嵯峨美術大学ホームページ (<https://www.kyoto-saga.ac.jp>)、2022年11月14日検索

東京交通短期大学『研究紀要』第28号

榊原英資 [2018]、『書き換えられた明治維新の真実』、詩想社

三縁の会ホームページ (<http://www.san-en.org>)、2022年12月3日検索

産経新聞 (2022年5月25日付、若泉敬、吉村信二の記事)

司馬遼太郎 [2007]、『新装版 王城の護衛者』、講談社

種智院大学ホームページ (<http://www.shuchiin.ac.jp>)、2022年11月14日検索

総務省統計局ホームページ (<https://www.stat.go.jp/data/k-sugata/index.html>)『統計でみる都道府県のすがた
2022』、2022年11月10日検索

上杉孝實 [2002]、『学問の都ー創造と自由の原点』、『京都学を学ぶ人のために』、世界思想社

若泉敬 [1994]、『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』、文藝春秋

矢部貞治 [1974]、『矢部日記 躑躅の巻』、読売新聞社

読売新聞 (2022年5月1日付、若泉敬、吉村信二の記事)

吉村信二 [2017]、『若泉敬先生に学ぶ』、私家版

写真

同志社大学西門 - 影栄館、京都大学百周年時計台記念館、龍谷大学本館、龍谷大学南麓、金戒光明寺〔松平容保公本陣旧蹟〕、二条城二の丸御殿〔大政奉還の舞台〕(以上、筆者撮影)

若泉敬京都産業大学教授、中央にアーミン・マイヤー駐日米国大使夫妻右側に荒木俊馬京都産業大学初代総長夫妻、左側に若泉敬夫妻(以上、吉村 [2017] より写真引用)